資料６

■地域における拠点・施設の役割（位置づけ）・連携案

（１）階上地区の概況

＜位置・歴史＞

本地区は、気仙沼湾西湾に面した地区で、地区を南北にＪＲ気仙沼線と国道 45 号が縦断し、沿岸部には川原漁港や波路上漁港をはじめとする漁港が複数点在している。

地区の大半は、農地や山林と住宅が混在しているが、近年は宅地開発が徐々に進行しつつある。

本地区は、明治８年（1875 年）波路上村・長磯村・最知村・岩月村の計 4 か村が合併して階上村が成立し、昭和 30 年（1955 年）大島村・新月村と共に気仙沼市に編入された。

江戸時代に波路上塩田が開かれ、これは赤穂藩の援助を受けて奥州で初めて播州流製塩法を取り入れた塩田で、生産された塩は伊達藩御用の上塩とされ、塩田は明治時代まで続けられた。

波路上塩田跡碑

＜震災の被災状況と復興事業＞

東日本大震災により、**地区の６割以上の家屋が全壊または半壊などの被災**をし、震災直後には 2,300 人以上の避難者を出した。

岩井崎では、**秀ノ山雷五郎像**が大津波に耐え、堂々と太平洋を見渡しているが、津波によって幹や枝などが被害を受けた松が、大きく曲がった幹と折れた枝が、まるで龍が昇る姿に見えることから、縁起のよい**龍の松**として話題を呼んでいる。

お伊勢浜海岸は、地盤沈下により砂浜が消失し、海岸防災林 1.3ha もほぼ消失したことから**復旧**に取り組んでいる。

宿泊施設は、震災前にあった旅館、民宿 11 軒のうち**４軒が再開**している。

これらの沿岸部は災害危険区域に指定され、復興事業として、防災集団移転促進事業、災害公営住宅整備事業、漁業集落防災機能強化事業、防潮堤整備事業などが計画・実施されている。

■東日本大震災による気仙沼市内の家屋被害

単位：棟

地区名	地区名	被害家屋棟数	地区の全棟数	割合
気仙沼	気仙沼	7,772	15,340	50.7%
	鹿折	3,847	6,250	61.6%
	松岩	2,295	6,334	36.2%
	新月	478	5,105	9.4%
	階上	2,721	4,417	61.6%
	大島	1,424	3,743	38.0%
	面瀬	1,272	3,589	35.4%
	小計	19,809	44,778	44.2%
唐桑	中井	417	2,356	17.7%
	唐桑	1,343	3,594	37.4%
	小原木	792	1,604	49.4%
	小計	2,552	7,554	33.8%
本吉	小泉	1,277	1,845	69.2%
	津谷	724	5,867	12.3%
	大谷	1,676	3,759	44.6%
	小計	3,677	11,471	32.1%
合計		26,038	63,803	40.8%

※平成25年3月31日現在。
※被害家屋には、全壊、大規模半壊、半壊、一部損壊を含む。

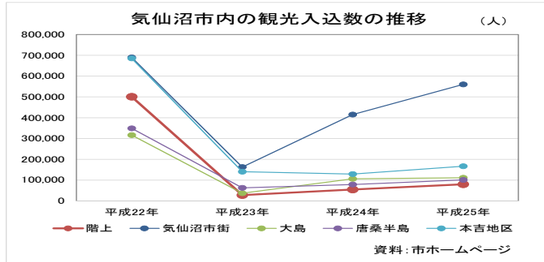
＜観光＞

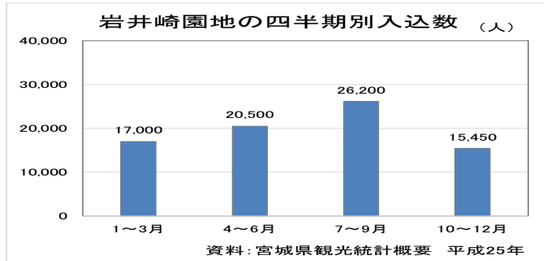
①観光入込客数

岩井崎地区は三陸復興国立公園や県立自然公園に指定され、岩井崎やお伊勢浜海水浴場などの観光資源に恵まれている。

階上地区への観光入込客数は、震災前には岩井崎やお伊勢浜海水浴場を中心におおむね年間 50 万人前後で推移していたが、震災により入込客数は著しく減少し、**平成 25 年時点で気仙沼市街地は大きく回復しているものの、その他の地区は回復が鈍い状況**となっている。

岩井崎園地への観光入込数は、夏季が最も多くなるが、**年間を通じて一定の入込**が見られる。



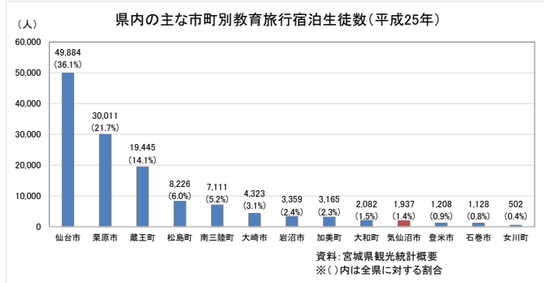


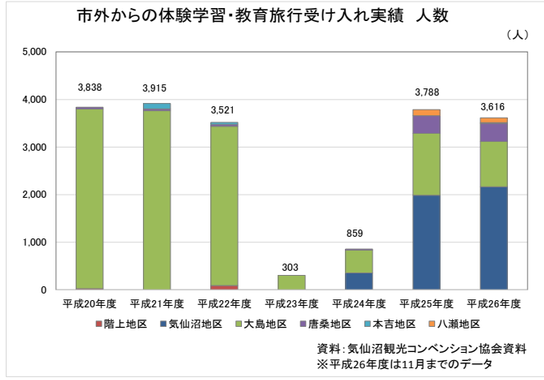
②教育旅行

平成 25 年の教育旅行での宿泊生徒数は、気仙沼市は 1,937 人で、全県の 1.4%となっており、**隣接する南三陸町を含む特定の都市に集中する傾向となっている。**

市内への体験学習・教育旅行人数は、震災前の規模に戻ってきているが、このうちの**大半を気仙沼地区や大島地区への来訪が占めている。**

今後、震災遺構としての旧気仙沼向洋高校を活用した教育プログラム開発や市内他地区との連携を図ることにより、本市が教育旅行先として選ばれるような魅力を高めていくことが期待される。





【階上地区の主な地域資源】

「潮吹岩」「ペルム紀化石」

潮吹岩は、長い年月をかけて海水により浸食された石灰岩地質からなる岩井崎の先端にあり、海蝕洞の岩孔に波が打ち寄せるたびに潮を吹き上げる。

岩井崎は、今から２億５千年前（古生代ペルム紀）海中に生活していたサンゴ・二枚貝・アンモナイト・ウミユリ・ボウスイ虫など数十種におよぶ化石を豊富に含んでいる。

「第９代横綱・秀ノ山雷五郎像」

岩井崎の先端付近に、郷土が誇る第９代横綱、秀ノ山雷五郎の銅像が大津波にも耐え、堂々と太平洋を見渡している。

「龍の形の被災松」

秀ノ山雷五郎像の脇にあった松の木で、津波によって幹や枝などが被害を受けたものの、一部が奇跡的に残って、高さ約２．５m、幹周り１．７mで、大きく曲がった幹と折れた枝が、まるで龍が昇る姿に見える。

「お伊勢浜海水浴場」

遠浅で波穏やかな海水浴場で、環境省の「快水浴場百選」に選ばれており、付近の岩場では釣りや磯遊びを楽しむこともできる。

（２）地域における施設の役割（位置づけ）・連携イメージ（案）

旧気仙沼向洋高校に求められる機能

- 震災遺構
- 展示機能
- 教育・普及機能
- 調査・研究機能
- 地域連携機能
  利用者サービス機能

連携の視点

【視点１】
東日本大震災の悲劇とその記憶を伝える

■旧気仙沼向洋高校の特色・位置づけ
- “現地”で“現物（本物）”を見ながら“そこでの出来事”を学習できる場
- 子どもから大人までを対象とする防災・減災学習・企業研修が実施できる場がある（施設・機能）

【視点２】
“海と生きる”ことを選んできた気仙沼の「自然と共に生きる」ことを伝える

■旧気仙沼向洋高校の特色・位置づけ
- 繰り返される津波に立ち向かって築かれてきた地域の暮らし
- 観光、体験、文化資源に恵まれた階上地区の主な地域資源の中心的位置（おおむね１km 圏内）

連携が想定される地域資源

＜階上周辺＞
- 岩井崎プロムナードセンター（被災）
- 慰霊碑
- 龍の松

＜その他市内＞
- リアス・アーク美術館
- 海の市・シャークミュージアム
- 津波体験館
- 東北大学災害国際研究所
- 他の震災遺構
- 安波山

＜市外の主な資源＞
- 陸前高田 国営追悼・祈念施設・奇跡の一本松等
- 南三陸防災対策庁舎
- 石巻 国営追悼・祈念施設・門脇小学校等
- ⋮

活性化関連資源

観光
- みちのく潮風トレイル
- 岩井崎（潮吹岩、石灰岩化石群、秀ノ山銅像）
- 三陸ジオパーク（気仙沼湾、唐桑半島、大島、大谷海岸）
- お伊勢浜海水浴場
- 道の駅大谷海岸
- 菖蒲沢ダム／気仙沼Ｃ

体験
- 塩づくり体験
- スローフード・食育運動
- 語り部
- 各種体験メニュー
- 各種体験メニュー
  - ・地引網
  - ・シーカヤック
  - ・養殖施設見学
  - ・そば打ち
  - ・民泊
  - ・牧場

文化
- 農水産物／郷土料理
- 伝統文化

連携の取り組み（案）

市内外震災関連施設等との連携による防災・減災教育の展開

Ⅰ．市内小中高生を対象とした防災・減災教育への遺構活用の取り込み
Ⅱ．市外からの修学旅行生を対象とした防災・減災教育への活用
Ⅲ．自治体・企業の研修旅行、復興視察の拠点としての活用と市内震災関連施設等の回遊
Ⅳ．一般観光客を対象とした旧気仙沼向洋高校への誘導

地域資源との連携による地域活性化の促進

Ⅴ．旧気仙沼向洋高校を拠点とした階上地区内の回遊

（３）連携の取り組み（案）

【市内外震災関連施設等との連携による防災・減災教育の展開】

Ⅰ．市内小中高生を対象とした防災・減災教育への遺構活用の取り込み

【目的】
・市内小中高校生を対象とした防災・減災教育の場として活用し、東日本大震災の実態と気仙沼の震災の歴史、先人の災害への対応・取り組みの姿を学ぶ。

【活用イメージ】
・市教育委員会や各学校での防災・減災教育カリキュラムの構築にあわせて、旧気仙沼向洋高校での現地見学・講習を盛り込む。
・旧気仙沼向洋高校のみならず市内外の被災状況や復興の取り組みなどについて幅広く学べる場とする。
・震災関連の研究者や学芸員、語り部・被災者による案内と講義のほか、教員のための指導研修も行う。

旧気仙沼向洋高校

震災時の出来事や必要な備えなどを現地で学ぶことで臨場感ある学習を行う
→遺構見学と講義
→地震・津波による災害と気仙沼の歴史、地域性の紹介
→語り部等による説明
→教員のための指導研修

⇔

市教育委員会・小中高校

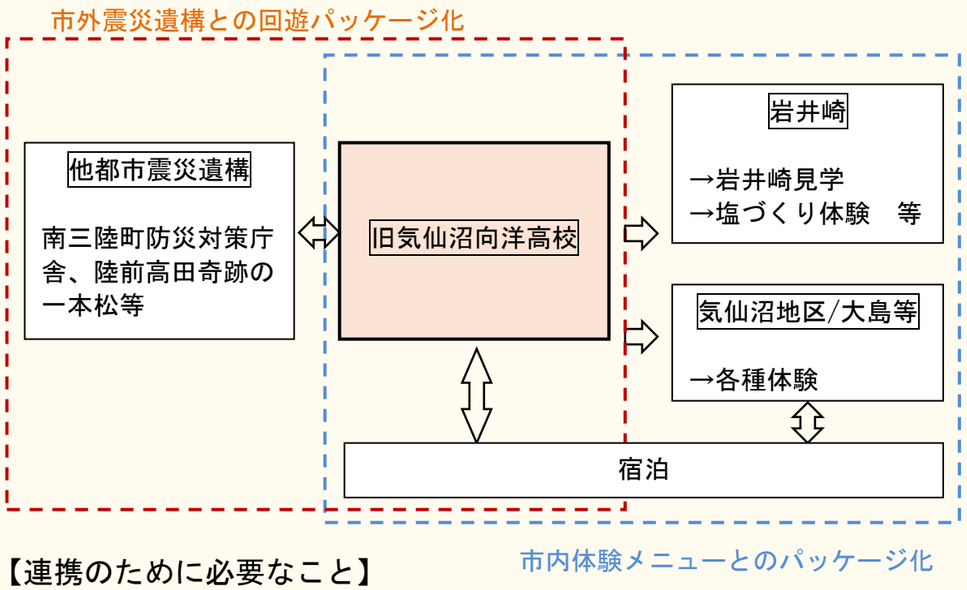
防災・減災教育への遺構活用の取り込み
→防災・減災教育カリキュラムの構築

【連携のために必要なこと】
・防災・減災カリキュラム構築における市教育委員会、各学校との取組み協力化
・地元住民の参画・協力
・バスなどの移動手段を確保することで、市内学校からの利用しやすさ向上

Ⅱ．市外からの修学旅行を対象とした防災・減災教育への活用

【目的】
・修学旅行をターゲットとして、他都市の震災遺構との回遊も視野に入れながら、旧気仙沼向洋高校での広域的な防災・減災教育と市内での各種体験、市内宿泊をパッケージ化することで特徴付けを行い、旅行先として選ばれるようにする。（近隣には被災の現場で研修を受けられる施設が無い）

【活用イメージ】
・市外震災遺構との回遊と旧気仙沼向洋高校での広域的な防災・減災教育のパッケージ化
・旧気仙沼向洋高校での学習と各種体験メニューのパッケージ化

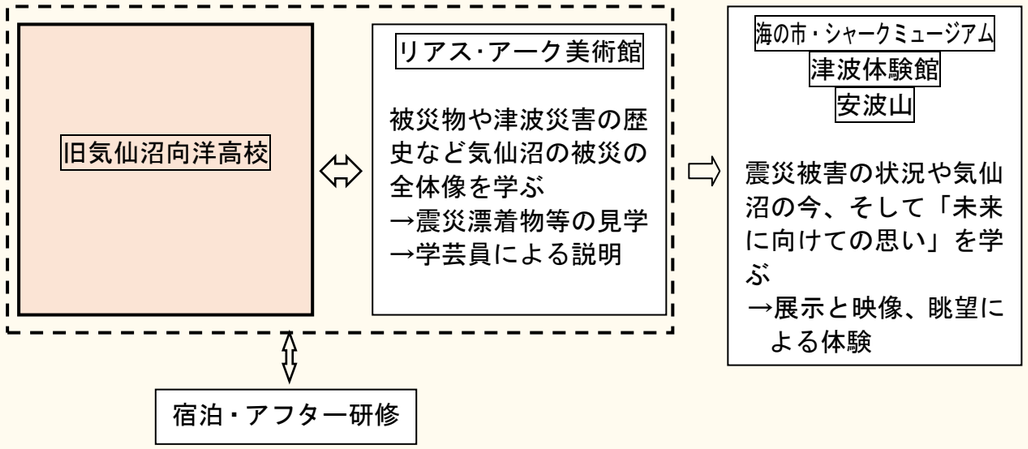


【連携のために必要なこと】
・各種体験メニューの充実
・宿泊機能の連携による収容人員規模拡充
・首都圏等遠隔地教育委員会・旅行会社等への誘致活動展開
・各施設における駐車場、トイレ、休憩施設等受け入れ環境整備

Ⅲ．自治体・企業の研修旅行、復興視察の拠点としての活用と市内震災関連施設等の回遊

【目的】
・自治体や地方議会による防災対策・復興事業の研修視察や、各種団体・企業等による研修旅行の受け入れ先として、旧気仙沼向洋高校が拠点となり市内各施設の回遊とあわせて気仙沼の震災の実態と復興の姿を学ぶ。

【活用イメージ】
・旧気仙沼向洋高校とリアス・アーク美術館を核として、震災の実態と気仙沼の震災の歴史、人々の復興への思い・取り組みを学ぶ。
・海の市・シャークミュージアムや津波体験館などへの回遊も想定する。

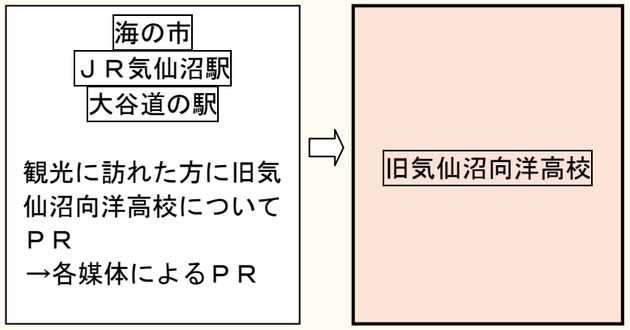


【連携のために必要なこと】
・防災・減災対策へのテーマ性を持った研修であるため、講義やレクチャーなどで他の参考になるような一定の専門性を備えた対応が可能なプログラム、体制を用意
・大学等の外部研究機関の誘致
・アフター研修としてのおもてなし

Ⅳ．一般観光客を対象とした旧気仙沼向洋高校への誘導

【目的】
・海の市などの市内の主要観光施設を訪れた一般観光客に旧気仙沼向洋高校まで足を伸ばしていただき、震災について学び気仙沼市への理解を深めていただく。

【活用イメージ】
・海の市やＪＲ気仙沼駅、大谷道の駅などを訪れた一般の観光客に、旧気仙沼向洋高校のＰＲを行い回遊していただくことで、震災の実態への理解を深めていただく。
・観光の延長で訪れることから、それぞれの施設を起点とした旧気仙沼向洋高校へのアクセスや周辺施設情報（飲食など）を総合的にわかりやすくＰＲする。



【連携のために必要なこと】
・防災・減災への取組みに関する包括的な周知戦略
・各メディアを活用した全市的な震災遺構ＰＲ展開
・各拠点施設における旧気仙沼向洋高校のＰＲ（ポスター、チラシ等）
・移動のための交通手段

【地域資源との連携による地域活性化の促進】

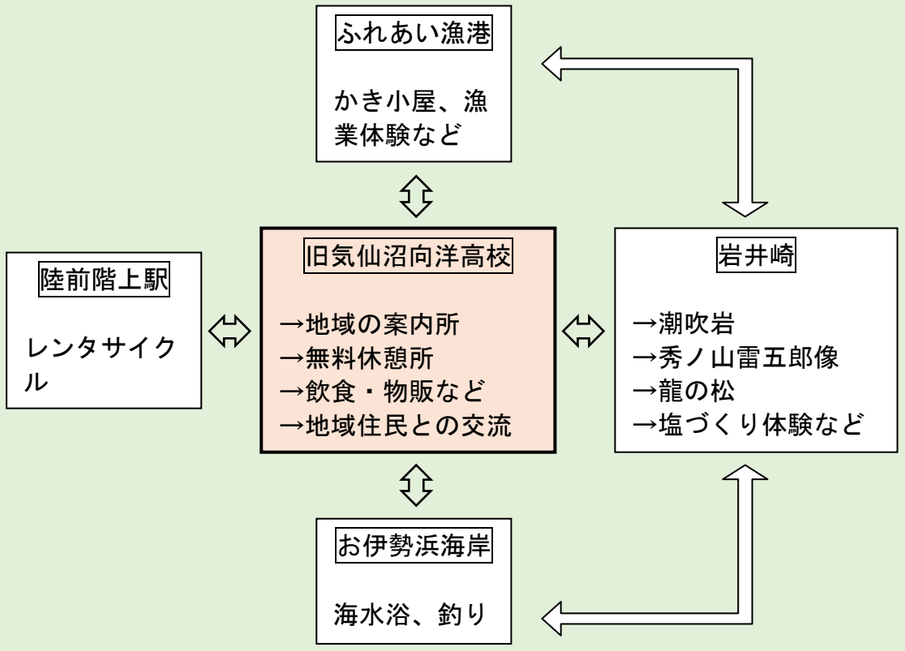
Ⅴ．旧気仙沼向洋高校を拠点とした階上地区内の回遊

【目的】

・旧気仙沼向洋高校を拠点に周辺の地域資源を回遊しやすい仕組みをつくることで、地域の魅力を高め来訪者を増やすことで地域との交流を生み出し活性化につなげる。

【活用イメージ】

・インフォメーション機能や被災したプロムナードセンター機能（休憩、簡易な飲食・物販施設等）、駐車場機能を旧向洋高校跡地周辺に配置することで、年間を通じてここを拠点におおむね１㎞圏内にある階上地区内の各資源を歩行または自転車で回遊できるようにする。
・旧気仙沼向洋高校グラウンドを、各種イベントが行える交流広場として活用する。
・お伊勢浜海岸への来訪者も旧気仙沼向洋高校に立ち寄り、休憩施設、飲食・物販施設を利用していただくよう誘導する。
・あわせて地域住民による“スローフード運動”や伝統芸能などの生活文化を取り込んだおもてなし、交流事業の展開を行う。



【連携のために必要なこと】

・旧気仙沼向洋高校周辺に駐車場（大型含む）、休憩所、トイレ、案内所、簡易な飲食・物販、交流広場機能を設置
・安全・安心して回遊できる歩行車・自転車スペースと案内サインを整備（みちのく潮風トレイルとの整合や防潮堤整備事業等復興事業との調整必要）
・地区内回遊のための二次交通として、ＪＲ陸前階上駅にレンタサイクルを設置
・ＰＲ戦略の構築と実践
・推進体制の構築

■歩行者・自転車スペースのイメージ

■レンタサイクルのイメージ

■案内サインのイメージ

■交流広場のイメージ

整備イメージ図

気仙沼ＣＣ
階上小学校
階上保育所
階上公民館
階上中学校（H33大谷中統合）
長磯浜線
桑３号線
下原浜線
レンタサイクル
陸前階上駅
国道４５号
波路上漁港
ふれあい漁港
国道岩井崎線
気仙沼向洋高校移転先
気仙沼向洋高校跡地
地福寺
琴平神社
観光交流広場
海の殉難者慰霊塔
岩井崎
向原岩井崎線
防災広場（計画）
コミュニティ広場
お伊勢浜海水浴場
公園・広場
サイクリング・回遊ルート